

いわゆる「結果状態継続／持続」を表す「テイル」文について

小西 正人

抄録：現代日本語のアスペクト形式「テイル」がもつ意味については、金田一（1950）をはじめとしてさまざまな分析が行われている。そのなかで中心的意味を表すとされているのが「動作継続／進行」・「結果（状態）持続」・「維持」であり、周辺の意味として「反復」「（動作）パーフェクト」「単なる状態」などが挙げられている。しかし小西（2020）において指摘したように、テイル形が用いられているにもかかわらず、必ずしも基体動詞によって表される（はずの）変件事象の「結果」状態を表しているわけではない場合が少なからずみられる。本論文では、これまで「状態変化動詞＋テイル」は通常「結果状態持続」を表し、特殊な場合は「単なる状態」を表す、と分析されてきたことに対し、「属性／（一時的）状態」と「単なる状態／結果状態」という分類を区別し直交させることにより、むしろ多くの「状態変化動詞＋テイル」形式が「単なる状態」を表している可能性、および「結果状態持続」を表す場合はそれほど多くない可能性があることを指摘した。

キーワード：結果状態、単なる状態、テイル、アスペクト

1. はじめに

現代日本語のアスペクト形式「テイル」がもつ意味については、金田一（1950）をはじめとしてさまざまな分析・名称が提唱されている。そのなかでいわゆる中心的意味を表すとされているのが「動作継続／進行」・「結果（状態）持続／状態持続／結果継続／結果残存」・「維持」であり、周辺の意味として「反復」「（動作）パーフェクト」「単なる状態」などが挙げられている。

しかし小西（2020）で示したとおり、テイル形が用いられているにもかかわらず、必ずしも基体動詞によって表される（はずの）変件事象の「結果」の状態が持続しているというわけではないという場合がみられる。

(1) a (だいぶ曲がっていた棒を真っ直ぐにのばしてみた後で)

これ、だいぶ真っ直ぐにしたけど、まだ少し曲がっているんだ。

b (解凍のために冷凍庫から取り出しておいた魚を見て) この魚、まだ半分凍ってる。

c 一晩寝てだいぶ回復したけど、実はまだちょっと疲れている。

それぞれの例において実際には「曲がる／凍る／疲れる」とは反対方向の変化が起こった後の「結果状態」が対象にあらわれているのにもかかわらず、それぞれ「テイル」形で（変化後の）状態を表すことができる。

本論文では上述の「テイル」がもつ意味のうち、ふたつめに挙げた「結果（状態）持続／状態持続／結果継続・結果残存」といわれる場合をとりあげ、その多くが事前の「状態変件事象」を必要としない「単なる状態」である可能性を指摘する。

2. 「結果状態」の先行研究

動詞分類を主眼とした金田一（1950）において、いわゆる「瞬間動詞」と結びついた「テイル」については、たとえば「第三種の動詞は・・・その動作・作用は瞬間に終わってしまう動詞である．・・・この種の動詞に「ーている」をつけるとその動作・作用が終わってその結果が残存していることを表わす」（金田一 1950: 49）などのように動作・作用の「結果」という意味をもつと考えており、「この釘（火箸）は曲っている」と言う時は、その釘や火箸は曾て真っ直ぐだったのが、ある時に曲ったのであるからこの「曲る」は瞬間動詞であるが、「この道は曲っている」と言う時は、初めから曲っているのであるから第四種の動詞の例である」（金田一 1950: 51）という「単なる状態」を表す場合と区別している。

その後の研究によって動作の継続性・瞬間性ではなく「状態変化による結果を生じるかどうか」という観点から動詞分類や「テイル」の意味を分析する方向へと進んだこと、またいわゆる accomplishment を「activity とそれによって生じる state の組み合わせ」という分析を行う語彙概念構造的な分析が英語や日本語において採用されたこともあり、これらの「テイル」の表す意味が「状態変化事象」の後に生じる「結果状態」であることがより強調されることになった（結果動詞については藤井 1966、出来事の表す時点と関連させた分析については森山 1988 および Igarashi & Gunji 1998、語彙概念構造分析については金水 1994、影山 1996、その発展形としての事象構造分析については岩本 2008、アスペクト体系としての分析については工藤 1995、工藤 2004 など）。

しかし「状態変化動詞」にアスペクト形式「テイル」が付加されたものが常に「状態変化後の結果状態の持続」という意味をもつわけではないことは、先に示した金田一（1950）にも言及されていることであり、その後の研究でも繰り返し言及されている。それにもかかわらず、「この釘は曲がっている」「電気がついている」「ドアが開いている」などの「状態変化動詞+テイル」の基本的意味が「結果状態継続/持続」として言及され、「この道は曲がっている」などの場合がむしろ特殊事例として「単なる状態」として挙げられるという分析については、特に詳細に取り上げられることはなかった。

本論文では、これまで「結果状態継続/持続」とされてきた「テイル」について、どのように（その結果をもたらす）事前の「出来事」が必要であるかということについて検証を行う。

3. いわゆる「結果状態継続/持続」を表す「テイル」文の分析

まず、本分析は「動詞分類」ではないことをはっきりさせておきたい。もちろん動詞（の表す意味）によって分布の偏りが生じるのは当然ではあるが、同じ形式であるからといって同じ意味を表しているとは限らないというのは改めて強調しておきたい。文脈や共起表現から「その文が表している意味」を慎重に見極める。

その場合、「テイル」形を述語としてもつ文が「対象の属性を表す」属性記述文であるか、あるいは「対象の一時的状態を表す」状態記述文であるかという分類と、その属性・一時的状態が「変件事象生起の結果」のものであるか、あるいはいわゆる「単なる状態」であるかという分類を区別して検証を進めていく。この作業仮説のもとでは、動作継続/進行的意味や維持的意味などを除けば「テイル」文は以下の4通りに分類されることとなる。

	属性	一時的状態
単なる状態	A	B
結果状態	C	D

ここで簡単な確認をしておきたい。

まず「変化の結果」状態であっても対象の属性を表すことができること、すなわち「無時制で不変の性質だけが属性ではない」ということをみておきたい。たとえば通常「長身である」「近眼である」などは生まれつきの性質でなくても対象の属性として認識されているし、焦げたものは端的に「黒く」、赤く塗られた壁は端的に「赤い」ということができ、これらは対象の「属性」であると判断することができる。

また影山（2008）において、一時的状態のように始点・終点と共起できないが「たぶん」などの時間表現と共起できるものを（「属性」とは別の）「半属性」として「愛想がよい」などの述語を挙げているが、本稿では特に区別せず「属性」として扱う。

それでははじめに「属性」・「単なる状態」を表す「テイル」についてみる（表 A 部分）。この意味を表す「テイル」文としては、まずは金田一（1950）が指摘した「この道は曲がっている」、影山（2008）が挙げる「新しい英語の先生は青い目をしている」など、多くの例を挙げるができるだろう。

次に「属性」と対立する「一時的状態」を表す「テイル」文について考察する（表 B, D 部分）。

まず（属性ではなく）一時的状態を表すということは、出来事と同様、時間的な広がりをもって生起する「状態」であるということがいえる。したがって影山（2008）にもあるとおり、時間的始点や終点が共起できれば「一時的状態」を表していると考えることができる。

(2) あの窓は昨日、午前中ずっと開いていた。

この「一時的状態」がこれまで「状態変化の結果状態継続/持続」と理解・分類されてきたわけであるが、小西（2020）で「テイル」形が用いられていても必ずしも基体動詞によって表される（はずの）変化事象の「結果」の状態が持続しているというわけではないという場合がみられることを示した。他に例を挙げると、以下のようなものがある（例は小西 2020 より）。

- (3) a だいぶ乾いたけど、まだ濡れている。
b きれいに洗ったけど、まだ少し汚れている。
c だいぶ片づけたがまだまだ散らかっている。
d だいぶ晴れてきたがまだ少し曇っている。
e だいぶすいてきたが、まだまだこんでいる。
f だいぶ疑いは晴れたが、まだ少し疑っている。

(3a) を例にとると、直前に起こった出来事は「乾く」という出来事である。より正確には「乾」方向への状態変化で、「濡」とは正反対の方向の状態変化である。しかし対象の状態は「(まだ)濡れている」と記述することができるということは、これらの「一時的状態」は「(基体動詞によって表される)状態変化」事象によって引き起こされたものではなく、したがって「結果状態」を表しているとはいえない。

もちろん「結果状態」といえないからといってただちに「単なる状態」といえるわけではなく、いわゆる「単なる状態」というものについての定義や説明が必要ではあるが、少なくとも本論文の目的である「結果状態持続/継続」を表すといわれる「テイル」文の再考という観点から考えると、ここでは「単なる状態」を「結果状態」ではない状態、すなわち「時間上に展開された特定の事象に対して、その「結果状態」であるという関係をもつ」というわけではない状態、としておき、これらの「テイル」文がその分類に妥当するとして次に進みたい¹⁾。

さらに小西（2020）では上述の現象が起こらない動詞のうち、その理由が「変化の方向性をもつ」と考えられる動詞が存在することを述べた。具体的には以下の2つのタイプである：

- 1) 「実際の現象として不可逆的な変化」を表す動詞：腐る、焦げる、更ける、枯れる、飽きる、（夜が）明ける、焼ける、ゆだる、炊ける、練れる、蒸れる、など。
- 2) 純粋に「変化の方向性」をもつ動詞：とける、砕ける、剥げる、染まる、癒える、懲りる、（目が）覚める、育つ、なつく、飽きる、抜ける、ほどける、こぼれる、（箱が）つぶれる、えぐれる、削れる、崩れる、ほぐれる、（字が）消える、変わる、など。

(4) a (2本だった紐を結ぶとちゅうで) *だいぶ結べたけどまだ少しほどけている。

b *この線、だいぶ濃くしたけれどまだまだ消えている。

これらの動詞を基体とする「テイル」形は「単なる状態」を表すことができるかどうか、次に考えてみたい。

まず1) について、例えば「焦げる」の「テイル」文「料理が焦げている」で料理の状態を表す場合、変化が不可逆であることに加えて「焦げる」という出来事を経なければそういった特定の状態に至らないということから、確かに「事前に基体動詞の表す出来事」が生起したとはいえるが、積極的に「その結果状態」である（上でみてきた「単なる状態」ではない）と主張するべきであるかは、難しいように思われる。

「変化そのものを表す動詞」として、自動詞では「変わる」以外にも「増える」「減る」などがあり、これらの動詞が示す「変わっている」「増えている」「減っている」は「(基体動詞によって表される)状態変化事象後の結果状態」を実際に表していると考えるのが妥当であるのに対し、これらの動詞の場合は「そのような特定の状態」になることは現実的に不可逆でありかつ他のルートがないというだけであり、その条件を外せば他の一般の「状態変化動詞」と変わらないためである。

2) に挙げられた動詞のうち、発生・消滅を表す動詞については「テイル」文が「状態変化後の結果状態」を表すと判断してよいだろう（そうでなければただ「ある/ない」というだけである）。これに関連して、存在/非存在の「経緯」を含む動詞（「残る、溜まる、積もる」など）も「状態変化後の結果状態」を表すと解釈可能となる場合が考えられ、また到着・離脱を表す動詞もやはり「状態変化後の結果状態」を表すと判断してよいように思われる（「駅に来ている」と単なる「駅にいる」を区別して表している）。さらに文脈によっては他の移動動詞（上がる、近づくなど）も「状態変化後の結果状態」を表すことができるだろう。これらの動詞例については、「2時間前から来ている」「3年前から時給は900円に上がっている」など「一時的状態」を表すことができるが、「その書類は肝

心な箇所が消えている／消されている」のように「属性」を表すことも文脈次第で可能である。

むしろ明らかに「結果状態」を表していると考えられるのは、いわゆる「動作パーフェクト」と言われる「テイル」である。「これまでに3度、アメリカに渡航している」というように経歴を表すような「テイル」文は「属性」を表すが、始点・終点を明示できる「一時的状態」としての例は難しいのではないと思われる²⁾。

ここではじめにみた「属性」・「単なる状態」を表す「テイル」(表A部分)をもう一度ふりかえってみたい。先ほどは「この道は曲がっている」などの「はじめからその状態であった」ことを「属性」と考え、「この釘は曲がっている」についてはとりあげなかった。先行研究においてもこれらの「テイル」文は「状態変化の結果状態(の持続)」を表しているとされてきた。しかし小西(2020)でも引用した寺村(1984)は以下のように述べている(少し長いが小西2020の該当部分を引用する)：

また寺村(1984)は(前節でも述べたとおり)「その眼前の事態の、他者と比較してのありかたを描こうとする方向に傾くとき、動詞の一つのアスペクトを表わすというよりも、形容詞のような性格を帯びるようになる」(寺村1984:137)としてこのテイルの用法を「形容詞的用法」とよび、「アノ人ハズイブンフトットテイルネ/彼女ハヤセテイルガ、健康ソウダ」という例を挙げ「当人の過去との比較ではなく、他の人との比較という意味を人はふつうに受けとるだろう。この後者のような～テイルの用法が、従来「単なる状態」とか、「ある状態、性質を帯びていること」を表わす用法とされてきたものである」(寺村1984:138)と述べた。(小西2020:39)

先ほども述べたとおり、「無時制で不変の性質だけが属性ではない」ということを考え合わせると、寺村(1984)がいう「形容詞的用法」は「属性」を表していると考えられるし、小西(2020)が扱った多くの状態変化動詞はKennedy and McNally(2005)のスケール構造を用いた分析によって基体動詞が表す「状態変化事象」と切り離れた形で「対象の状態」を表示することができるため、「この釘は曲がっている」における「曲がっている」も「結果状態継続/持続」ではなくむしろ「単なる状態」として「この釘」の属性を表していると考えべきである。

「属性」・「結果状態」(表C部分)として分類できるのは、先に「変化そのものを表す動詞」としてあげた動詞類の「テイル」文が該当する。また影山(2008)は接尾辞「-化」の分析の結果、「[X化]という述語は「ある名詞がXという固有の属性を持つものに(半)永久的に変化する」という意味を表す」(影山2008:37)と述べており、その「テイル」形は「対象の状態変化の結果、属性となった」ことを表していると考えられる³⁾。

以上のように考えると積極的に「状態変化後の結果状態継続/持続」とするべきもの、あるいは消極的にでもそうせざるを得ないものはほとんどないことがわかる。

本論文において「単なる状態」を表す「テイル」と再分析したものは、「単なる状態」を表すための語彙が(日本語には)ないため、状態化表現「テイル」形を動詞に付加して形成した形であり、状態変化後の結果状態という意味を積極的に表すという形ではないと考えることができるだろう。

4. おわりに・今後の展望

小西 (2020) では「テイル形が用いられているにもかかわらず、必ずしも基体動詞によって表される (はずの) 変件事象の「結果」の状態が持続しているというわけではない場合」である現象について詳しく考察を行ったが、「単なる状態」との関係については深く分析することができなかった。本稿において「属性/一時的状態」と「単なる状態/結果状態持続」とを交差分類させたことにより、これまで「単なる状態」として扱われてきた現象 (あるいは反対に「結果状態持続」として無批判に扱われてきた現象) をある程度クリアに見通すことができた。

しかし本稿では以下の「テイル」文について、分析を深めることができなかった。

- タクシスのパーフェクトを表す「テイル」文は「一時的状態」かどうか。
- 「財布が落ちている」「ガスが漏れている」などの状況を描写する「テイル」文について。

また「車が駐車場に停まっている」「財布が道に落ちている」というテイル文において「事前に発生したと予想される」出来事は「車が駐車場に停まった」「財布が道に落ちた」よりは「(誰かが) 車を駐車場に停めた」「(誰かが) 財布を道に落とした」が適切であるように感じられる (そして多くの自他対応をもつ動詞でも同じ現象が見られる) が、本稿はおもに状態変化自動詞に言及したのみであった。今後の課題としたい。

注

- 1) 小西 (2020) ではこれらの現象が可能な動詞について、「[それ以前の事象に言及することなく対象の (言及時における) 状態を記述することができる] という共通性をもつことを挙げるができる。すなわち「曲がる」類であれば、対象の状態が下限値 (真っ直ぐ) を少しでも超えていれば、以前の状態がどのようなであったかにかかわらず「彎曲状態である」と記述することができるし、また「積もる」類であれば、同じように以前の状態にかかわらず、現にいま「積雪状態である」と記述することができる」(小西 2020: 36) とし、「この場合、基体となる動詞は時間的変化、すなわち「対象の状態の初期値と終了値との (正方向の) 差異」を表さず、テイル形とともにスケールに基づいた「非時間的」な (標準値との) 差異 (寺村 (1984) のいう「他者と比較してのありかた」を含む) を表している」(小西 2020: 36) との分析を行った。
- 2) 「すでに3個食べているが、4個めに手が伸びるのは時間の問題だ」というような場合は「一時的状態」といえるかどうか、今後の検討課題としたい。
- 3) しかし、例えば「通常状態・巨大化状態・超巨大化状態」という3つの状態をもつ対象があり、「超巨大化状態」から「巨大化状態」へ (小さく) 変化した場合に「まだ巨大化しているからだいじょうぶだ」ということは十分に可能ではある。

文献

藤井正, 1966, 「動詞+ている」の意味”. 金田一春彦編, 1976, 日本語動詞のアスペクト, 97-116, 東京, むぎ書房.

Igarashi, Y., and Gunji, T., 1998, “The Temporal System in Japanese,” Takao Gunji and Kôiti Hasida eds., *Topics in Constraint-based Grammar of Japanese*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers,

chap. 4, 81-97.

岩本遠億, 2008, 『事象アスペクト論』 開拓社.

影山太郎, 1996, 『動詞意味論 一言語と認知の接点』 くろしお出版.

影山太郎, 2008, “属性叙述と語形成”. 益岡隆志編, 叙述類型論, 21-43, 東京, くろしお出版.

Kennedy, C., and McNally, L., 2005, “Scale structure, degree modification, and the semantics of gradable predicates,” *Language* 81: 345-381.

金田一春彦, 1950, 「國語動詞の一分類」『言語研究』 15, 48-63.

金水敏, 1994, “連体修飾の「～タ」について”. 田窪行則編, 日本語の名詞修飾表現. 29-65, 東京, くろしお出版.

小西正人, 2020, 「状態変化の方向と「ている」」『北海道文教大学論集』 第 21 号 : 29-45.

工藤真由美, 1995, 『アスペクト・テンス体系とテキスト —現代日本語の時間の表現—』 ひつじ書房.

工藤真由美, 2004, “現代語のテンス・アスペクト”. 北原保雄監修, 尾上圭介編, 朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ. 172-192, 東京, 朝倉書店.

寺村秀夫, 1984, 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版.

森山卓郎, 1988, 『日本語動詞述語分の研究』 明治書院.

On “-te i-” Sentences Representing “Result States” in Japanese

KONISHI Masato

Abstract: Various analyses have been made on the meaning of the aspectual form “-te i-” in modern Japanese, beginning with Kindaichi (1950). Among them, “action continuation/progressive,” “result (state) continuation,” and “maintenance” are considered to represent central meanings, while “repetition,” “(action) perfect,” and “simple state” are listed as peripheral meanings. However, as pointed out in Konishi (2020), sentences in which the “-te i-” form is used, but which do not necessarily express the “result” state of the (supposed) change-of-state event expressed by the base verb, are easy to come across. So far, conventional analyses have argued that “state-changing verb + -te i-” usually expresses “result (state) continuation,” while in special cases it expresses “simple state.” In contrast, this paper proposes the possibility that many “state-changing verb + -te i-” forms express “simple state” and that the number of cases expressing “result state continuation” may not be as great as has been claimed. That possibility and its implications are induced in the current paper through a deliberate distinction and orthogonalization of two similar but distinct axes constituted by “property/(temporary) state” and “simple state/resultant state.”

Keywords: -te i-, aspectual meaning, result state, simple state